



Title	江戸遊郭における美的理念再考一通と洒落に関する一考察一
Author(s)	橋本, 凜
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/89583">https://hdl.handle.net/11094/89583</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 （ 橋 本 凜 ）	
論文題名	江戸遊廓における美的理念再考 —通と洒落に関する一考察—
論文内容の要旨	
<p>江戸期遊廓は、公娼制の展開を背景とし、遊女や遊客から成る独自の文化圏を形成していた。美的理念である「すい」「通」「いき」などはまさしくその直系の産物であり、哲学的アプローチや文学的アプローチ、社会学的アプローチなど、様々な側面からその意識現象に焦点が当てられてきた。このうち、とりわけ「通」に関しては研究者たちの意見が必ずしも一致しているわけではなく、「知識に通暁する」という意味合いが強いことから、それを美的理念の範疇に含めるか否かという点が議論の焦点となっている。ただ、従来研究においては、「通」の意識現象の解明に拘泥するあまり、その客観的表現の部分を看過する傾向があった。一方、特に安永年間（1772-1781）において「通」との密接な関わりが論じられるようになった「しゃれ」概念に目を向けると、それが衣裳や言葉など、「通」の客観的表現の層を担う役割を果たしていたことがわかる。つまり、「通」が、先行研究の指摘するように「通な」という形で衣裳や言葉などを形容することがきわめて少数である一方、その役割を「しゃれ」が担っていたのである。このように、遊里美的理念が別の概念を通じて客観的表現をなすという性質は、他の美的理念を見ても類を見ない。したがって、本稿ではそのような特殊性を持つ「通」概念を「しゃれ」というスキームを通じて再定義し、遊里美的理念史上に位置付けることを第一の目的とする。</p> <p>また、この「しゃれ」の語は「おしゃれ」などの形で現代でも用いられているが、その根本的な性質や構造は江戸期遊廓において形成されたと考えられる。江戸期美的理念と、それ以降の日本人の価値観を直接的に結びつけて論ずることは難しいが、それが通時的に変容し、生活の中に根付いていったことを明確にできれば、現代日本人の有する美的理念の構造の一端を明らかにすることができる。本稿で取り扱う「しゃれ」は、「通」の呪縛を解かれた後、その構造が明治期以降の日本人の価値観の中に強く根付いたという特徴を持つ。その意味において、「しゃれ」のスキームを通時的な視点から論ずることは、現代に続く遊里美的理念研究として、新たなモデルケースを構築することにつながるという意義がある。ゆえに、本稿においては、明治期以降、特に第二次世界大戦終戦までにおける「しゃれ」の展開について論ずることを第二の目的とする。</p> <p>まず、第1章においては、本稿の背景知識となる遊里およびその美的理念の展開史を概観した。具体的には、遊廓が身装文化や浮世絵、文学などの「文化的創造力」を持つようになった一因として、公的権力が後ろ盾となった「集娼制」の成立が挙げられることを提示した。つまり、文化の基盤となる「社会」が成立したことが、遊廓において多様な文化が開花した理由のひとつだった。また、「すい」「通」「いき」の三要素の重なる部分が大きく、それらが一つの線上にあったことを先行研究の内容を敷衍しながら述べた。</p> <p>第2章においては、「しゃれ」「通」の先行研究と、残された課題について論じた。まず、「しゃれ」に関して提示した問題点は以下の3点である。</p> <p>1点目に、そもそも江戸期の「しゃれ」が和語「しゃれ」と漢語「洒落」の結びついたものであるが、漢語の流入経路が詳らかにされていない点を提示した。</p> <p>2点目に、一部の先行研究において「しゃれ」の通時的変遷が論じられているものの、①元来同床でない漢語「洒々落々」と和語「しゃれ」を同一線上で展開したものと見なしている研究②学術的な『色道大鏡』の表現を一般的なものと捉え、それが洒落本の時代に静的で固着した存在に墮したと見なしている研究について、その出発点が適切ではない可能性が高いことを示した。</p> <p>3点目に、江戸期の「しゃれ」の性質について、それを体系的に考察した研究がないことを指摘した。</p> <p>次に、「通」研究の問題点として、以下2点を挙げた。</p> <p>1点目に、「通」が視覚的要素を含んでいるか否かという問題に関して、いずれの主張も論拠が弱いという点を</p>	

示した。というのは、「通」を美的理念ではないと見なす論考への反駁として、現状明示されているのが、管見の限り流行の衣裳を描いた『風俗通』という書名のみだからである。これは、反証のひとつとして有用ではあるが、『風俗通』という書名は単に漢籍を踏襲したものであるため、論拠としてはやや弱い。

2点目に、先行研究においては「通」が「通な」という形をほとんどとらず、事物を形容しないことを根拠として美的性質が薄いと述べられているが、実際は「通」の客観的表現たる「しゃれ」がその機能を担っている可能性が高い点を指摘した。

第3章では、漢語「洒落」の流入を論ずることにより、江戸期遊廓における美的理念に至るまでの「しゃれ」の語彙史を補完した。管見の限り、最も早く日本へ「洒落」の語が流入したのは、中国の漢詩集『文選』である。ここでは、漢語「洒落」が「落ちる」「洗い流される」という意味で使用されていた。平安期(794-1185)の日本の漢詩文を見ると、『文選』と同様、「落ちる」という意味での使用がなされていることが確認できる。しかし、同時期の中国の詩文に焦点を当てると、「洒落」の語が人物の風姿を形容する際などにも用いられている。このように、日本の漢詩文において「落ちる」という用法が多用される傾向は、平安期の漢詩文が『文選』に強い影響を受けていたことに由来すると考えられる。

一方、清らかな心性などを示す「洒落」および「洒々落々」という語は、遅くとも13世紀の半ばから14世紀にかけて、禅籍を通じて日本に流入していたことを提示した。また、抄物類を参照すると、難解な語の注釈箇所「洒落」の語の使用が見られることから、それが口語として頻繁に用いられていた可能性が高い。なお、冗談を示す場合は「シャレ」というカナ表記が用いられていることから、当代においては精神性を示す「洒々落々」と「シャレ」は別の語として捉えられていたことがわかる。ゆえに、先行研究で示されていた、「洒々落々」が静的に固着したものが江戸期の「しゃれ」であるとする論理は、誤謬の可能性が高いことを指摘した。

第4章においては、『色道大鏡』および遊女評判記、浮世草子の嚆矢としての井原西鶴における作品群の用例を取り扱い、洒落本に至るまでの「しゃれ」の用法や位置付けについて考察した。

まず、『色道大鏡』においては「通」の前史である「気のとほる」と「しゃれ」が同義のものとして見なされていた。ここでは、「しゃれ」が他者の心情を機敏に察知する美点として示されている。一方、より実用的な色彩の強い遊女評判記類を参照すると、『色道大鏡』と同様の意味のほか、諧謔・冗談の意味や遊廓における「遊び」を示す用法も見られた。つまり、実用的性格の強い書物の中では、「しゃれ」は単なる言葉遊びの意味で使われる場合も存在したのである。したがって、先行研究において単純に『色道大鏡』の時代を「しゃれの動的な時代」と一括りにし、それが様式化された諧謔の呼称に墮していったとする論理は正確ではないという点を提示した。

また、西鶴の作品群を調査した結果、そこでは「好事家」としての意味や、事物を評価する用法で「しゃれ」が用いられていることが明らかになった。加えて、「しゃれ」という概念が「通」と同様、対立する多数派の他者の存在を前提として立脚する相対的な概念であったことについても言及した。

第5章においては、洒落本における「しゃれ」、とりわけその語が流行した安永年間における用例を中心に、その構造と遊里美的理念史における位置付けを考察した。調査対象としたのは洒落本の叢書である『洒落本大成』で、317篇の洒落本において1,217例の用例が得られた。そして、そのうち71.7%が「冗談で行う言動」を指す用法であったことから、江戸期における「しゃれ」の中心的な意味がそこにあった可能性が高いことを指摘した。また、その用例を鑑みると、それ以降の洒落本の定型を作り上げた『遊子方言』以降用例数が急増し、安永年間にかけて「しゃれ」と「通」を密接な概念として結びつけるような言説が多数見られるようになったことについて考察を加えた。質的アプローチから明らかにした「しゃれ」の要素は、①皮相性を有すること②中庸性を有すること③錬磨されていること④流行性を有すること⑤「遊び」と「余剰」の性質を有すること⑥動的性格を有すること⑦「通」、すなわち「人情の機微を察する」能力がその根本にあることの7項目である。そして、それらを図として表し、「練度」「頻度」「質」という3つの観点から、「理想的なしゃれの層」を視覚化した。

以上のことを踏まえると、安永年間は、意識現象としての「通」、そしてそれを源流に措く「しゃれ」を優位に位置付けた一方で、「通」から離れた表層的な「しゃれ」を劣位に措いた時代であったとも捉えられる。つまり、安永年間以降における「しゃれ」は単体で美的理念となり得ることはなく、何らかの源流を必要とする概念として位置付けられることとなった。このような二元的世界観は、後続する「いき」の成立にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。というのは、先行研究においては、「いき」が「すい」「通」の特に精神面の部分を抽出して誕生した理念であることが指摘されているからである。つまり、皮相的なものよりも精神性を重視する「いき」成立の過程には、「通」の時代において精神の部分と皮相的な部分が明確に切り分けられたことが大きく関与している可能性が高い。その意味において、「通」成立の過程は、遊里美的理念史上において非常に大きな意味を有していたことを指摘した。

第6章においては、遊里美的理念の皮相的な部分を指し示す「しゃれ」がいかにして遊里という場の呪縛から解き放たれ、日本人の価値観に溶けこんでいったかという点を、『朝日新聞』および『読売新聞』の用例を中心として考察した。オンラインデータベースにおいて検索を行った結果、『読売新聞』においては、1875～1943年の期間に539件の用例が、『朝日新聞』においては1879～1945年の期間に246件の用例が見られた。これらの用例群を①「冗談」に類する用法②審美的な判断を下す用法③書籍等の名称④その他という4項目に分類し、10年ごとの比率の推移を示したところ、1910年代までは①冗談に類する用法が大半を占めるものの、それ以降は②審美的な判断を下す用法が一挙に増加したことが明らかになった。特に、1930年代に至ると、それが全体の約80%を占めるようになる。つまり、少なくとも新聞上においては、1910-1920年代がひとつのターニングポイントとなり、江戸期の洒落本において滑稽性が重視されていた「しゃれ」は、審美性を主に指し示すものへと変容したのである。本章においては、その点について以下のような観点から考察を加えた。

まず、諧謔の「しゃれ」に関しては、江戸期と同様「社交の道具」として用いられていたことを指摘した。具体的には、著名な人物の冗談が新聞記事において取り上げられたり、「しゃれ」を社交上の技術として標榜する書籍が出版されていたりしたことを提示した。また、冗談の意味の「しゃれ」は、主に男性が述べるものとして捉えられていた。

一方、審美性を示す「おしゃれ」については、それが強い論調で批判されたり、矯正されるべきものとして提示されたりすることがあった。ただ、その用例数が最も多くなる1930年代には、近代辞書の嚆矢である『大言海』において「婦人ノ語」という表記が見られるようになる。つまり、この時代に至り、「おしゃれ」の語は明確に女性の世界のものとして措定されることになった。また、「おしゃれ」の語の使用が急増したきっかけのひとつとして、大衆文学『お洒落狂女』の影響を指摘した。加えて、モダンガールや映画の台頭も深く関係していると考えられる。そして、皮相的な「しゃれ」が批判される一方、江戸時代にそれが「通」と結びついていたように、それをより高次のものと結び付けようとする動きも存在した。具体的に言えば、精神性、創作性、女性美などがその「高次」のものであった。

以上のように、本論文は、従来看過される傾向にあった「しゃれ」概念を通じて江戸期遊里美的理念史を再考し、その明治期以降の展開の一端を明らかにしたものである。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (橋本 凜)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	岩井茂樹
	副 査	教 授	加藤 均
	副 査	准教授	柴田芳成
	副 査	准教授	佐野方郁
	副 査	准教授	水野亜紀子

## 論文審査の結果の要旨

提出された論文「江戸遊廓における美的理念再考―通と洒落に関する一考察―」は、江戸時代の美的理念、とりわけ遊廓や遊廓文学において美的理念と見做されてきた通や洒落という概念に注目し、それらの言葉の由来や、典故、意味、概念の範疇を、時代順に分析し、その変遷を明確化しようとしたものである。論文の構成は、序章、第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第6章、終章からなっている。

序章では、なぜ通や洒落という概念を取り上げるのか、先行研究ではどのような問題点があるのかについて述べた後、本研究の分析対象となる時代などの範囲を明確にし、論文全体の研究目的がまとめられている。

第1章では、通や洒落が求められた遊廓に関する基本的知識とその変遷について概観している。ここでは、遊廓に美的理念が生まれた一因として、「集娼制」があったことが提示される。それによって、遊廓、または遊里という文化を生産するような社会が生まれたという。これによって、本論文で取り上げる通や洒落だけではなく、「いき」や「すい」といった美的理念が生まれることになったという。この時点では、こうした美的概念間にはそれほど大きな差がなかったと論者は述べる。

第2章は、通や洒落の先行研究で残された問題点を再度明確にし、その上で通については、これが美的理念であったこと、また洒落については和語の「しゃれ」と漢語の「洒落」の関係性などについての考察を行い、これらの概念が美的理念であったと述べる。

第3章は、洒落という語の語彙史について論じた章である。元来、漢語の「洒落」は『文選』などの漢詩に見られるものであり、そこでは「落ちる」「洗い流される」という意味で使用されていたという。それが禅籍の影響により、13～14世紀ごろに清らかな心性を表現する言葉へと変わっていったことを論者は用例を使用して証明する。この点は従来研究では見られなかった点であり、大きく見解が異なる点でもある。

第4章では、『色道大鏡』や遊女評判記、浮世草子、洒落本などを対象として、そこで使用されている洒落の意味や美的範疇について分析と考察を行う。その結果、通や洒落のいずれもが対立する多数派の他者の存在を前提として立脚する相対的な概念であるという。

第5章では、洒落本など洒落という語が流行した安永年間における用例を中心に、洒落の構造と美的理念としての位置づけを行う。分析の結果、論者は、この時期の洒落には以下の7つの要素が見られるという。①皮相性を有すること、②中庸性を有すること、③錬磨されていること、④流行性を有すること、⑤「遊び」と「余剰」の性質を有すること、⑥動的性格を有すること、⑦「通」すなわち「人情の機微を察する」能力が根本にあること、である。通は洒落の根本となっているものの、この時期は意識現象としての通を優位におく一方で、客観的表現の洒落は劣位に位置付けられた時代であったという。論者はこの時期に、元来共通するところの多かった通と洒落の乖離を見ているわけである。

第6章では、主に明治期以降の洒落の用法について述べた章である。遊廓という場を離れた洒落がどのような形で日本人の心性や日本語として受容されていったのかについて論じる。主に新聞記事などを分析対象として、その用法を分析する。この結果、主に冗談の意味の洒落は男性において使われ、お洒落などの服装についての洒落は社会から逸脱した華美な女性を批判する用語になったという。

終章では、第1章から第6章までの内容を簡潔にまとめながら、通と洒落について通史的かつ総合的に概観している。そして最後に、本論文で残された問題点と今後の課題について述べて論文を閉じている。

本論文は、江戸期の遊廓で美的理念と見做されてきた通と洒落の関係性の変化を明らかにすることを第一の目的としている。そのため、用例の収集に重点が置かれ、分析と考察が手薄になっていることは否めない。しかし、「いき」や「すい」などと異なり、従来あまり注目されてこなかった通や洒落という語にあえて注目し、これまで知られていなかった新しい典拠を発掘し、その変遷を通史的に明確化した点は、きわめて高く評価できるであろう。

以上のような点をふまえて、論文審査委員会は、全員一致で本論文が博士（日本語・日本文化）の学位にふさわしいものであるという結論に至った。